

III-7

インフレ、デフレの影響

日本経済はインフレとデフレの影響を繰り返し受けてきました。消費者物価指数という代表的な指標を見ると、経済成長期には前年度に比べ伸び率が大きく、インフレ傾向にあったことが分かります。一方、バブル経済の崩壊以降はマイナスとなるが増え、デフレの時代に入射したことを示しています。インフレとデフレはなぜ起こるのでしょうか。その仕組みと影響を理解すれば、各国の政策への理解度が深まります。

インフレーション(インフレ)とは物価が継続的に上がることです。その反対に、デフレーション(デフレ)とは物価が継続的に下がることです。これらの経済現象は、経済や人々の暮らしに大きな影響を及ぼしてきました。

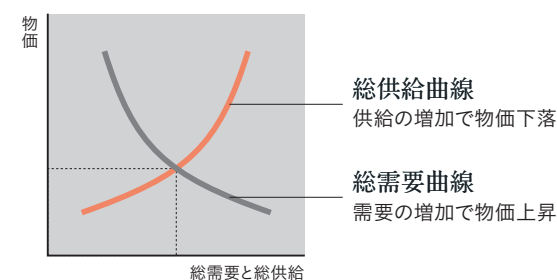
総需要曲線と総供給曲線の交点で物価が決まる⁽ⁱ⁾

そもそも物価はどのように決まるのでしょうか。図III-7-1をご覧ください。II-4で学んだAD曲線(総需要曲線)とAS曲線(総供給曲線)です。この交点で物価が決まります。

経済全体で見て、需要が供給よりも旺盛ならば物価は上がります。需要が増えれば、総需要曲線が右に移動し、物価が上昇することが分かります。これが継続することがインフレの典型的なパターンです。逆に、供給の方が強ければ物価は下がります。これが続く現象をデフレと呼びます。

野菜など個別の商品の価格をイメージすれば理解がしやすいでしょう。例えば天候不順でレタスの生産が減少したとします。それに対して、レタスが欲しいという需要が堅調であれば、価格は上がります。一方、豊作でレタスが取れ過ぎると、供給量が増えて価格が下がります。ただし、ここで論じる物価は、あらゆる財やサービスの価格の全体的な動きを指します。

▶ 図III-7-1 物価が決まる仕組み



石油価格の高騰がインフレを招いた⁽ⁱⁱ⁾

インフレを起こす原因には様々なものがあります。ここでは主に2つの考え方を解説します。1つは需要超過がインフレを起こす「ディマンドプル・インフレ」です。総需要を変化させる要因は様々です。例えばマネタリストのひとつの考えでは、貨幣供給量の増加をその大きな要因として挙げます。

ある期間において、名目貨幣量の増加率が実質国民所得の増加率を上回ると総需要曲線がシフトして、ディマンドプル・インフレが起こると主張します。これは、「貨幣数量説」で説明できます。貨幣供給量の拡大は、インフレを誘導するための金融政策として様々な国が採用しています。

もう1つが「コストプッシュ・インフレ」です。商品を作るには、人件費や材料費がかかります。労働組合の圧力によって賃金が上昇したり、資